

「咲く」事に思う

庄原赤十字病院院長 中島 浩一郎

私の本棚に、一冊の本があります。ベストセラーにもなっているので皆さんご存知だと思いますが、渡辺和子さんの「置かれた場所で咲きなさい」という本です。渡辺和子さんは、2.26事件でご尊父の錠太郎陸軍教育總監を亡くされ、後にナミュール・ノートルダム会の修道女になられた方です。さまざまな分野で活躍されており、著書や講演集などは数え切れません。その中でもこの本が心に残るのは、私を含め多くの人が「今、自分の置かれている場所」のことを何らかの形で考えたことがあるからだと思います。

昭和56年、私は庄原赤十字病院に初めて赴任しました。その理由はくじ引きの結果というだけのこと、庄原市がどこにあるかもよく知りませんでした〔実は海沿いの町と聞いていました〕。その後自ら望んだり命令されたり、いつの間にか30年以上お世話になっています。その間「ここは本当に自分の居るべきところなのか」「この病院で成長できるのか」と何度か考えました。活躍している同級生たちの話を聞いては、喜び半分寂しさ半分ということもありました。しかしながら今考えてみても、私は素晴らしい土に植えられていました。指導者・先輩・同僚・後輩や多くの人々の、心づくしの土でした。私が咲いたかどうかは怪しい限りですが、この土に植えられたことには心から感謝しています。

先日ニュースを見ていた時のことです。ノーベル賞の受賞会見での「人の役に立つことをするんだよ」という言葉が耳に飛び込んできました。老科学者の口から、訥々と語られる言葉が胸を打ちました。そのとき、ふとこの本のことを思い出しました。美しく咲いた花を見て、

人は喜びまた癒され笑顔を見せるでしょう。渡辺和子さんがこの本に込めた気持ちが、少し分かったような気がしました。咲いた花は、人に喜ばれてこそ。また、つぼみでも小さな双葉でも、きっときれいな花が咲くという希望を与えられる。そのようなことを考えながら、日本人の快挙を喜んでいました。

ところで、私たちの病院の医師数は37名です。その中に、内科を中心とした後期研修医が約10名います。庄原で頑張って研修するんだと、張り切って赴任してくる者もいます。担当する患者さんや、疾患に打ち込んで寝食を忘れる者もいます。同僚や先輩、コメディカルと熱心にディスカッションしている者もいます。時には落ち込んだり、ふさぎこんでしまう者もいます。そんな彼らに対して私たちのできることは、できるだけ良い土壌を準備してあげることです。水をやり肥料に心を砕くことです。咲かせるのは彼らです。自分にとっても患者さんにとっても、美しい花を咲かせるのは彼ら自身です。庄原の地は、彼らにとって良い土であることは間違いありません。でも私たちのすることですから、至らないところも数え切れなと思います。さまざまな不満や不安は、当然でしょう。それでも彼らは今、ここを置かれた場所としてくれています。

実は彼らが、今いる庄原の土を毎日耕してくれている事を、私は知っています。私たちが準備するというのはいり上がりで、彼らと共に精魂したからこそ土は、ますます豊かになっているのです。おかげで、庄原赤十字病院の花壇は、日々花盛りです。